

令和2年度 第2学期終業式

令和2年12月23日(水)

おはようございます。今日で、令和2年度 第2学期が終了しますが、あなたにとって、どんな2学期だったでしょうか。

今年1年を振り返ると、残念ながら、今もなお、日本を含め世界は新型コロナウイルス感染症の感染拡大という危機的事態に直面しています。そのような中で、3年生は学校祭を成功させ、2年生は修学旅行を大いに楽しみ、1年生は学習や部活動で藤島の生徒らしく成長するなど、みなさんの力を改めて実感できました。

一方、目を外に向けると、この事態の中、日々、重い責任と感染の恐怖の中で、ストレスにさらされながらも、献身的に医療・看護に取り組んでおられる医療従事者の方々の姿を、連日のように報道等で目にします。

これらを通して、自分の日常の生活が多くの人に支えられていることに思いを馳せ、自分は、今、何をすべきかを絶えず問われ続けた1年だったのではないのでしょうか。

このように自分の人生をしっかり見つめ、仕事を通して社会に貢献している人は沢山いらっしゃいますが、今日は、その中の一人で、2016年にWHOの医務官を退職された、スマナ・バルアさんという医師を紹介したいと思います。彼は故郷バングラデシュの内戦で、九死に一生を得る体験をされながらも、地域医療の重要性を認識し、過去20数年にわたり、故郷バングラデシュの農村地帯や、医学生として過ごしたフィリピン・レイテ島などで、女性の健康と出産、そして寄生虫学に関する地道な研究支援活動に、継続的に取り組んでこられたお医者さんです。

そのバルアさんは、各国の医学生や、若い医師、看護師さんから「心の師」として慕われ、多くの方は親しみを込めて「バブさん」と呼んでいるそうです。そのバブさんは、若い医師たちへの講演の中で、最初に自分自身のことを知る努力をしなければならないと話されます。

「あなたのおじいさん、おばあさん、そして、お父さん、お母さんがどのくらい働いてどのように苦勞してあなたを育ててきたのか」と、問いかけます。そして、「人間として人間を世話する」ためには、まず、人間を深く理解することが大切で、「医者として」働き始める前に、「人間として」人間のお世話をする経験を持ったほうが

良いと・・・人間を知った上で、人間として、人の心を大事にしながら、お世話をするのがとても重要なことだと訴えます。また、「自分の出来るところから取組み始めなさい。若いうちに苦勞をし、自分の基盤を作りなさい。困難にぶつかり、それを解決する努力をすることは大切なことです。人は、なにか困難にぶつからないと気づかないし、分かりません。病気になってはじめて健康のありがたさが分かるように。そして、困難を克服していく中で自分の基盤が作られてきます。」と話が続きます。

そして、最後に、『『専門家』として看板を出す前に、学生時代に、自分で壁にぶつかりながら多くの経験を積みなければならない」、「自分が何かを出来るようになったら、それを後輩たちに伝えるのが次の仕事になる」ということを強調し、講演を終えられます。

バブさんが、講演で読まれる詩^しを紹介します。

わたしは誰なのか？

わたしはどこからきたのか？

どのようにしてここに来たのか？

ここからどこへ行くのか？

どのようにしてそこへ行くのか？

そこで何に取り組むのか？

皆さんも、この一年を振り返り、コロナ禍の中で「自分は、今、何をなすべきなのか」を、各人がしっかりと考え、行動し、これからの人生を歩んでいって欲しいと思います。

皆さんのこれからの活躍に期待を致しまして、終業式の訓話とします。